

## 育てることの困難

高石 恭子

「育てることの困難」というテーマが与えられています。個人的なことですが、今まさに私自身が子育ての真つ最中でして、日々困難が立ちはだかる状況です。「子育て支援するんじゃないかってほしいんだけど」というのが私の口癖です。

それはさておきまして、この度はこれまでの学術フロンティアの五年間の共同研究にご参加くださいました先生方も多数おいですので、まずこの五年間のまとめを申し上げて、それを踏まえながら今後の展開についてお話をさせていただきますと思います。

子育ての困難というのは、それこそ人間が霊長類だった頃からあったのだろっと思えます。けれども、それが現代のような形で問題になってきたというのはいったいなぜだろうか、という疑問がこの研究テーマの出発点にあります。ちょうど前回の学術フロンティアの研究プロジェクトを立ち上げていた時期に、神戸須磨の少年Aの事件をはじめとする、かつてなかったような不可解な、衝撃的な青少年の事件がいくつか起きました。それから、親による子供の虐待事件、子殺しなどが相次いでいました。私たちはこのような、かつてなかったような母子関係

の危機をどんなふうに理解して、どんなふうに心理的に支援していけばいいのかと考えました。それにはやはり今までの枠組みではなく、新しい理解の枠組みをもってあらなければならぬ、それを模索しなければならぬというのが危急の課題としてまずあったわけです。そこで松尾先生と私が中心になって、多くの研究員の方々、お名前を全部あげるとはしませんが、れども、や大学院生等に加わっていただいて、この研究課題に取り組んでまいりました。

一年目、二年目は、カウンセリングセンターの新しい母子支援の場をどういうふうに作っていくかという、設計整備の段階の仕事がかなりありました。その次に、実際にカウンセリングルームで、地域のお母さんと子供たちを呼んで子育て支援の事業を立ち上げることが続けました。それまでも甲南大学心理臨床カウンセリングルームでは地域の方を対象に心理的支援を行ってきましたが、その対象は、何らかの症状や問題をお持ちの方々が中心でした。それを初めて今回、特別に障害や症状があるわけではない一般の健康な範疇に属する親と子を対象とする支援の場を作ってみました。そうしましたら、紀要等の報告書にも詳細が述べられていますように、ここ数年の間にのべ数千人の親子がカウンセリングルームにいらっしやいました。このような支援へのニーズが、予想以上に高まっているということ、われわれは実感した次第です。

そこで、もう少し客観的に現代の子育ての状態がどういうふうになっているかを調べてみようということになり、三年目にあたる年に「子育て環境と子供に対する意識調査」という調査

を、京阪神でかなり大規模にさせていただきました。お産のあり方からはじめ、どういうことが育児のストレスになるか、手助けしてくれる人がいるかないか、などいろんな要素についてアンケートをとってみました。それから虐待との関連についても関心がありましたので、親が子を叩くことや、体罰としてとの関連をどう考えているかなどについて回答してもらいました。そうすると、家族の支えが非常に薄いなかで育児をする現代の若いお母さんたちのあいだに、育児ストレスが非常に高まっているという状態像が浮かび上がってきました。

また三年目には、「現代人と母性」と題するシンポジウムを開催いたしました。先ほど申し上げた調査とシンポジウムの企画準備の過程で行った研究会などを通じて、周産期医療の現場や周産期の育児支援の場で最先端のお仕事をされている研究者の方々と交流をする場を持つことができ、そのことが大きな刺激となったということも、忘れてはならない点です。周産期というのはお産前後の時期ですが、それは母子関係の原点を育むところです。タイトルに「近代化のひずみ」という副題がついていますが、現代の最先端の大病院でのお産は、その分娩台にのってみられた方はよくお分かりだと思っただけです。あれこそ近代化のひずみの最たる象徴ではないかと私は思っております。堅い台に縛りつけられて、赤ん坊が出てきたら医療という名のもとに臍の緒をちぎりと切られて、赤ん坊はどこかへ連れ去られてしまふ。母子関係もそこで切られてしまふわけですね。それから、従来のわが国のお産であれば家庭のなかに出産場面があつて、親から子へ、そして孫へという形

で世代間の命の受け渡し文化が伝達されていく場面が用意されていましたが、大病院の分娩室からは家族が排除されます。そこで命を継承していくという文化も断ち切られてしまいました。そういう文化が生きている時代があつたということをもう一度思い起こさねばならないということを、改めて思いました。

その分娩台での、大病院での出産というのが一般化するようになったのが、わが国では一九七〇年代だったと思います。私が生まれた六〇年代は、まだ助産院とか自宅分娩が比較的正常にありました。ということは、七〇年代以降、急速にそういう分娩台でのお産ということが普及してしまつたわけですね。ちょうどそこで生まれた人たちが大人になつてわが子を育てるという時代になつたのが二〇世紀の終わりです。一九九〇年代から二〇〇〇年にかけて、育児ができない、困難だということが大きな問題になるようになってきています。両者のあいだにはやはり確実な相関関係があるだろうと考えています。こちらのパンフレット（開所式で配布した小冊子）に、親が子育てをすることが困難になつてきたのは子供の側の発達の変化もあつて、それとの相互作用だということが書かれています。子供の発達のプロセスがかつてとは変わってきたということの一つの大きな要因には、母子関係の原点のところで、近代化によつて母子の絆が断ち切られたということがあつたのではないかと言うこともできると思います。あまり詳しく話す時間はないのですが、生まれたての人間の赤ん坊というのは、医学的な措置を施さずにおけば自力でお母さんのおなかを這い上つてお母さん

のおっぱいに吸いつきにいく力を持っているというような、新しい知見も伺ったことがあります。そういう、人にもあったはずの、自分の親をどういうふうに認知するか、自分が一体どういう生き物なのかということを刷り込まれるインプリンティングに似たような現象　鳥類でしたら、生まれて数時間後、十数時間ぐらいまでに見た「動くもの」を自分の母と思うわけですが、そういう現象が生じるための時期を、近代化、テクノロジーというものが切断してきたわけです。その功罪を改めて問い直さなければならぬのではないかと、ということを痛切に考えさせられた研究でした。

四年目、五年目の残りの研究期間においては、意識調査の続編としまして、母親ではなくて今度は父親、それから子育てをしている祖母にも同じ調査を実施し、それぞれに報告書を作成しました。ご関心のおありの方がいらっしゃいましたらお送りさせていただきますと思います。

以上がこの五年間の研究の経過です。次に、今後それをどう発展させていくかということですが、以上のような成果を踏まえながら、可能であれば五年ごと、十年ごとのような継続的な調査研究も実現していきたいながら、今後、より多角的な視点をもつて、この子育ての困難の問題、母性の問題の研究を進めていきたいと考えております。

私自身は現在、学生相談を専任でやっております、大学の学生さんたちに日々お会いしています。ちょうど九〇年代初頭ぐらいに小学校で学級崩壊のことが取り上げられるようになった時代がありました、あれからちょうど十年ほどが経ちまし

た。世代的に考えると、ここ二、三年のあいだ、学級崩壊世代の子供たちが大学に入学してきていることになりました。確かにここ二、三年、大学生でもう年齢的には成人していて、普段は基本的にはまじめな方たちのあいだで、何か思い通りにいかないことがあると突然教室の中でものを蹴つてみたり、暴言を吐いたり、飛び出していったりする。そういうことが起こるようになってきております。学生相談室の方でも、年々、学生だけではなくてその保護者の方、親に対する相談活動の重要性が増してきているという印象を受けています。そういう流れもあり、子育てや母子関係ということとを、「乳幼児とその親」というふうに狭めて見るのではなくて、もっと青少年の子供とその親までをも視野に入れつつ、いろんな形で検討していきたいと思っております。家族の歴史、家族社会学、それから女性と母性をどのような兼ね合いで考えていくかという意味で、いろいろな分野の方に是非積極的に参加をお願いしまして、学際的な検討ができればと思っております。この、より広い意味での親子関係の困難というテーマは、もう一つのサブテーマであります、「高度成長を生きた子供たち　戦後効率主義の帰結」とも、そのあたりでうまくリンクするのではないかなとも思っております。シンポジウムを開催するのはまだ先ですので、そこまで具体化はしていない段階ですが、今後またいろんな先生方にお願いをすることがあるかと思えます。その時にはどうぞよろしくお願いいたします。